

第三者評価検証委員会 結果報告及び最終提案書

信濃小中学校第三者評価検証委員会

目 次

2ページ	1 信濃小中学校第三者評価検証委員会の経過と役割
5ページ	2 信濃小中学校の成果と課題として出された意見
8ページ	3 信濃小中学校の評価検証結果
11ページ	4 信濃小中学校のリフォーム(改善)コンセプト
13ページ	(1) 持続可能な”ふるさと学習”へ改善
22ページ	(2) 新たな特別支援体制の構築
30ページ	(3) 学校を核とした地域協働の推進
36ページ	(4) 日課と学校行事の検討
39ページ	5 提案を具体化するために今後検討すべき事項

1 信濃小中学校第三者評価検証委員会の経過と役割①

- ◆委員長 斎藤 義益 (郡山市立湖南小中学校初代校長)
- ◆副委員長 近藤 洋一 (野尻湖ナウマンゾウ博物館長)
- ◆委員 加藤 哲文 (国立大学法人上越教育大学教授)
- ◆委員 藤倉 二三男 (浦和ルーテル学院元校長)

1 信濃小中学校第三者評価検証委員会の経過と役割②

第1回
(7月23日)

- ・委員長及び副委員長選出
- ・信濃小中学校の概要説明
- ・校内視察

第2回
(9月25日)

- ・全国学力・学習状況調査及びNRTテストの結果
- ・ふるさと学習及び学校行事の説明
- ・就学決定及び特別支援教育体制の説明
- ・教職員との意見交換(教務主任等6名)

第3回
(11月5日)

- ・これまでの振り返り
- ・義務教育学校の良い面と信濃小中学校の課題を整理
- ・教職員との意見交換(着任2年以内の教員5名)

第4回
(2月25日)

- ・評価検証のまとめ
- ・具体的提案の検討

第5回
(9月24日)

- ・前年度の検証結果の確認
- ・今年度の学校状況の報告

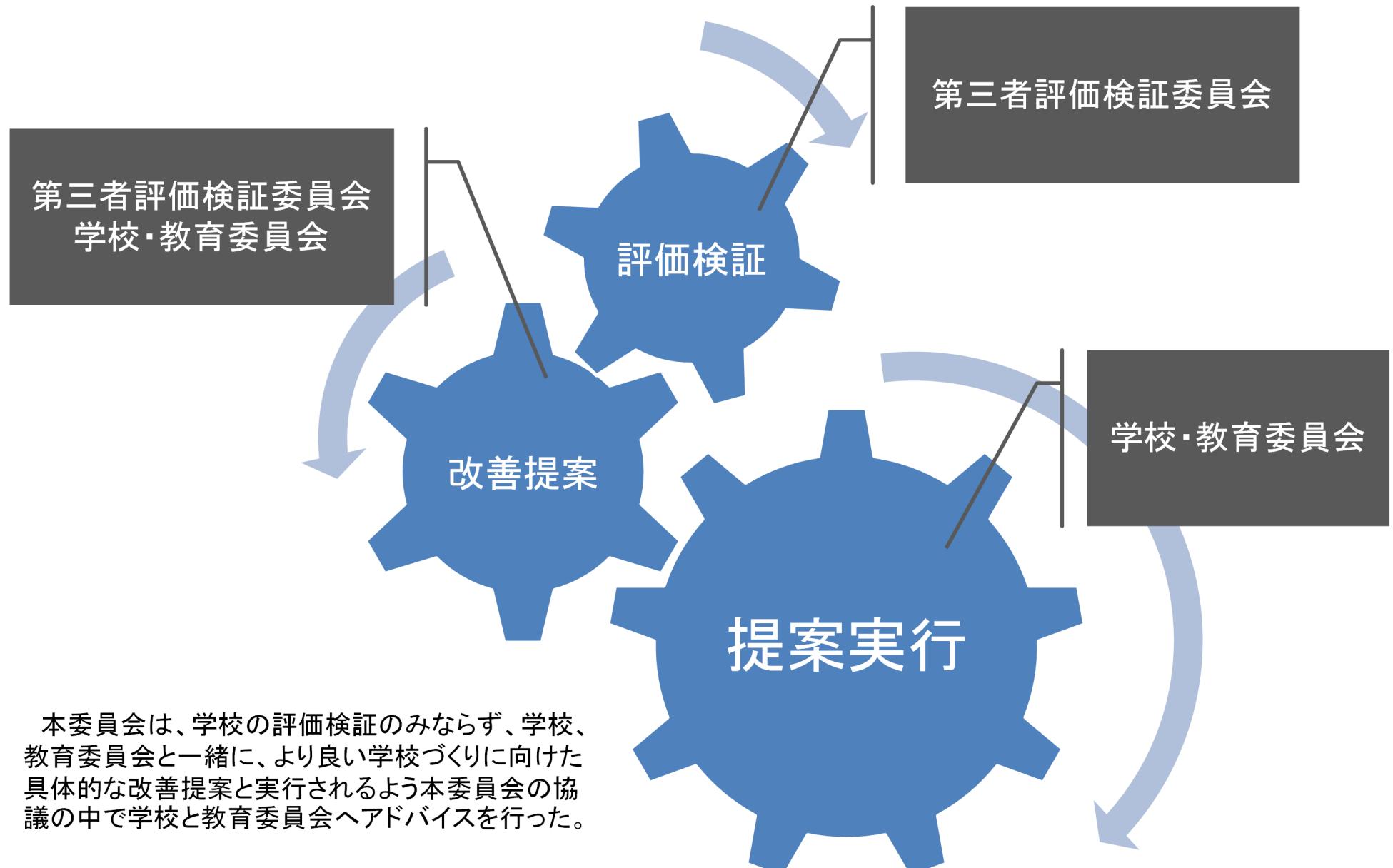
第6回
(12月10日)

- ・野尻湖ナウマンゾウ博物館視察
- ・一茶記念館視察
- ・ふるさと学習と地域連携を協議
- ・学校日課について協議

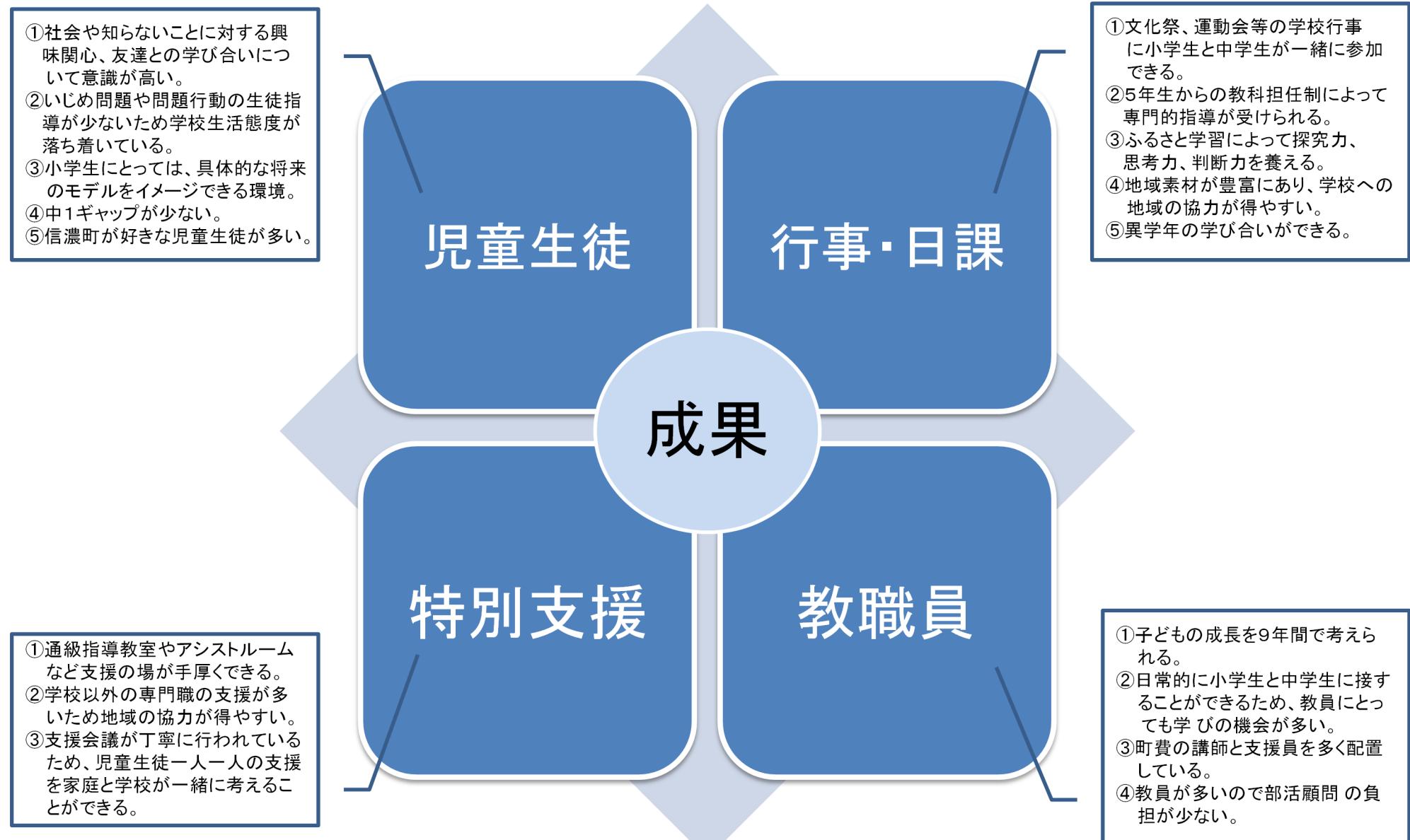
第7回
(2月25日)

- ・最終結果報告及び改善提案書のまとめ

1 信濃小中学校第三者評価検証委員会の経過と役割③

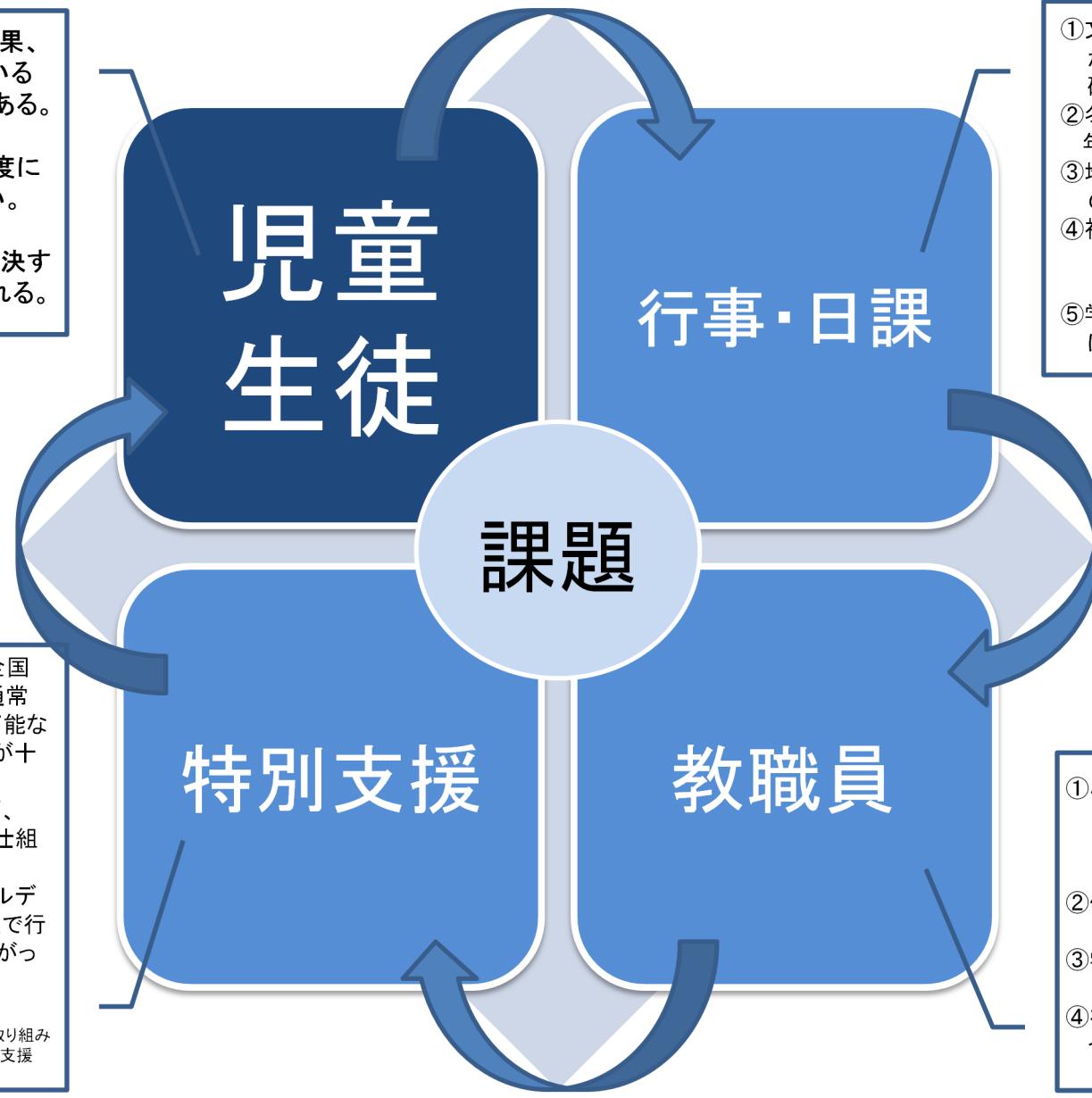


2 信濃小中学校の成果と課題として出された意見①



2 信濃小中学校の成果と課題として出された意見②

- ①全国学力質問紙調査の結果、将来の夢や目標を持っている児童生徒が少ない傾向にある。
- ②全国学力調査の結果、年度によって正答率の差が大きい。
- ③困難なことを自らの力で解決する意欲が低い傾向が見られる。



- ①文化祭や運動会などの学校行事が多いため、教科学習の時間の確保が難しい。
- ②冬日課は5時間授業であるため、年間の授業時間数の確保が難しい。
- ③地域素材が多くて、ふるさと学習の取り組みが難しい。
- ④初等部と高等部で授業時間が異なっているため、学校運営が複雑になっている。
- ⑤学校行事がスクールバス運行時間に大きく左右される。

- ①特別支援学級の在籍率が全国平均と比較して高い。また通常学級で個に応じた支援が可能な児童生徒への具体的検討が十分になされていない。
- ②個別支援の場が様々あるが、複雑なことから全教職員が仕組みを理解していない。
- ③通常学級での※ユニバーサルデザインの工夫が一部の学級で行われているが、全学級へ広がっていない。

※ユニバーサルデザイン：
全ての児童生徒にとって分かりやすく、取り組みやすい授業や生活方法を考慮した指導・支援方法のこと。

- ①小学校と中学校の学校文化が融合した義務教育学校の文化と、目指すべき子ども像を共有することが難しい。
- ②信濃小中学校に慣れたころに人事異動があるため、継続性が弱い。
- ③学校管理職の異動で、教育方針や理念が浸透しづらい。
- ④初等部と高等部が話し合う機会や対話が少ない。

2 信濃小中学校の成果と課題として出された意見③

	成 果	課 題
児童生徒	<p>①いじめや問題行動が少なく、落ちついた優しい子が多い傾向にある。また信濃町を好きな子が多い。</p> <p>②全国学力調査の結果、6年生から9年生にかけて正答率が毎年向上している。</p> <p>③社会や知らないことに対する興味関心、友達との学び合いについて意識が高い傾向にある。</p>	<p>①困難なことに挑戦したり、自ら解決したりする意欲に欠ける傾向がある。将来の夢や希望を抱くことができない子どもが多い傾向もある。</p> <p>②全国学力調査の結果、6年生は全国平均からやや低い傾向にある。また年度によって全国学力調査の正答率の差が大きい。</p>
行事日課	<p>④文化祭や運動会等の行事に小学生と中学生が一緒に参加できるなど、異学年による学び合いがしやすい環境にある。</p> <p>⑤5年生から教科担任制であるため、専門的な指導を受けることができる。</p> <p>⑥地域学習の素材が豊富にあるため、学校への地域理解が高く協力が得やすい。</p>	<p>③学校行事が多く、冬日課になると5時間授業になるので、教科学習の時間確保が難しい。</p> <p>④授業時間が、初等部45分、高等部が50分と異なっているため、小中一貫教育の良さである小学校と中学校の教職員の交流が持ちにくい。</p> <p>⑤スクールバスの運行時間が学校行事の実施に影響を与えている。</p> <p>⑥地域素材が多いので、すべてをふるさと学習に取り組むことが難しい。</p>
教員体制	<p>⑦教職員は、日常的に小学生と中学生に接することができる。そのため、9年間の子どもの成長を考えられるなど、教員として学びが多い環境にある。</p> <p>⑧町費の講師、支援員が多く配置されている。教職員数が多いため、部活顧問の一人あたりの負担が少ない。</p> <p>⑨通級指導教室やリソースルームなど個別支援が手厚い。学校以外の専門職などの地域支援と連携がしやすい環境にある。</p> <p>⑩一人一人の子どもの支援会議が丁寧に行われている。</p>	<p>⑦初等部と高等部が一緒に話し合う機会が少ない。また、小学校文化と中学校文化が融合した独自の義務教育学校の文化をつくることが難しい。</p> <p>⑧義務教育学校独自のシステムに慣れた教職員が異動すると、転入した教職員には、義務教育学校の教育方針や理念が浸透しづらい。</p> <p>⑨特別支援の場が複雑で全教職員が支援の仕組みを理解することが難しい。</p> <p>⑩通常学級でのユニバーサルデザインの工夫が一部の学級で行われているが、全学級へ広がっていない。また特別支援学級の在籍率が全国や県と比較して高い。</p>

3 信濃小中学校の評価検証結果①

平成24年4月に開校した信濃小中学校は、多くの町民の思いと願いを叶えて誕生した施設一体型小中一貫教育校である。

開校から10年の節目の年に向けて、これまでの成果と課題を評価、分析し、より良い学校を創造するため、第三者の立場から評価検証する本委員会を設置し、委員4名が委嘱された。

評価の視点は、開校時からの学校基本理念である「信濃町に誇りを持ち、次代を担う人材育成」とした。

委員会は7回開催され、そのうち2回を学校の教職員と懇談し、現場の声を反映させる評価検証を行った。

信濃小中学校が、信濃町の子ども一人一人の原風景となる教育活動を実施し、地域や社会に貢献できる人材育成の場となることを願い、下記の検証結果を報告する。

記

(1) ふるさと学習と教育課程

ふるさと学習の成果は大きく、信濃町が好きな子どもが増えている。また、知的好奇心が高いことや友だちと学び合う楽しさを実感しているなどの成果が出ている。その一方で地域の学習素材が豊富にあるために、その全てを教育課程に取り入れることが難しくなっている。

今までのふるさと学習の成果と課題を検証し、発達段階を考慮して、学習すべき内容を精選することが大切である。そこで、ふるさと学習のゴールを子どもや教職員、保護者、地域住民が共有できる9年間のカリキュラムの作成が必要であると考える。

3 信濃小中学校の評価検証結果②

(2)教職員の同僚性

義務教育学校は、特有の教育システムのため、赴任直後の教職員に戸惑いがある。

教育観や指導観の違いに悩み、教職員の間に壁ができることは、他の小中一貫教育にも見られる傾向である。本校にも同様の悩みが見られ、その悩みの要因は、教職員の対話と交流が不足していることだと考えられる。望ましい義務教育学校としての文化を醸成するため、人事異動があっても持続性のある学校運営の体制を整備することが大切である。

そこで教育委員会は、本校の建学の精神である学校基本理念や、育てたい子どもの姿、信濃町の良さを赴任した教職員に伝える研修や交流の機会を設けて、本校で勤務する喜びと使命感を実感させることが必要と考える。また、初等部と高等部の授業時間を統一して、教職員の指導体制の分かりやすさを実現し、ストレスのない交流を増やすべきと考える。

学校は、教職員が9年間で育てたい子ども像を共有できる研修や対話の機会を意図的、かつ柔軟に設けることができる環境づくりが必要であると考える。

(3)学力と特別支援教育

小中一貫教育の成果として、6年生から9年生にかけて全国学力調査の正答率が向上しているが、年によっての正答率の差が大きい。また、特別支援学級の在籍率が全国平均と比較して高い。

在籍率が高い理由は、子どもの特性や課題に応じた受け入れの体制ができていることや、町費職員を配置することで一人一人の子どもへの支援が充実しているためである。その一方、通常学級への復帰を促す取り組みや、通常学級での個に応じた教育的配慮が不足していることが考えられる。

そこで、通常学級への復帰を増やすため、本人や家族が望む進路と、それを実現させるプロセスを共有する相談体制や、通常学級でのユニバーサルデザイン教育、特別支援教育の体制の見直しが必要であると考える。

3 信濃小中学校の評価検証結果③

(4) 心の教育

異学年交流の学校行事や日常的な小中学生の関わりによって、優しく落ち着いた子どもが多い。その反面、困難なことを自らの力で解決する意欲が低い傾向が見られる。また、全国学力質問紙調査の結果から将来の夢や目標を持っている子どもの割合が低いことが指摘されている。

学校生活の中では、励ましあい、支えあい、認めあいながら切磋琢磨をして自己を高める体験が貴重である。

そこで、自己を鍛え、自分が必要とされる喜び(自己有用感)を育成するため、発達段階に応じた切磋琢磨の機会を学校行事や地域学習、道徳教育で意図的に取り組むため日課の再編成と、年間行事計画の見直しが必要であると考える。

(5) 地域に開かれた学校行事

信濃小中学校は、平成16年3月に設置した「信濃町小学校適正配置検討委員会」、平成19年3月に設置した「教育環境検討委員会」、平成21年4月に設置した「学校づくり委員会」、平成23年4月に設置した「信濃小中学校開校準備委員会」の委員として、延べ約160人の地域の方が参加をして、延べ60回以上の会議と懇談会を開催しながら対話と協働によって開校した地域の学校である。

「学校運営協議会」や「しなの学校応援団」など地域の方が、学校へ関われる機会があり、小中一貫教育の良さを関係者は理解している。

また、学校関係者だけでなく、多くの地域の方が、運動会や文化祭を見たり、参加したりできる機会を増やすことができれば、信濃小中学校への町民の期待や応援が高まることが期待される。

そこで、子どもが主役になった9年間の成長を感じられるダイナミックスな学校行事を多くの方に見てもらえるために、土日祝日の開催を学校と地域が一緒になって検討する必要があると考える。

4 信濃小中学校のリフォーム(改善)コンセプト①

①地域と連携したゆとりある
年間行事計画

②授業時間を一元化
した新たな日課

リフレッシュ
(元気を回復)

③体験学習と教科学習を結んだ
「ふるさと学習」による学び合い

④誰にでも分かりやすく
やさしい学級指導

リフレーミング
(枠組みを外す)

⑤地域人材の活用
による持続性のある
学校運営

⑥PDCAサイクルの循環
による学校評価の仕組み

リフレイン
(繰り返し持続)

リフレクション
(振り返り内省)

⑦教職員間の対話
による目指すべき子どもの姿の共有

⑧教職員研修の充実による義務
教育学校文化の醸成

4 信濃小中学校のリフォーム(改善)コンセプト②

多様な関わりから多
様な価値観を知る

教科学習と結び
ふるさとで学ぶ

UDによる特別
支援教育を改革

ポジティブな
多層的行動支援

(1)持続可能な
”ふるさと学習”へ改善

(2)新たな特別支援
体制の構築

応援団長が地域と学校
をつなぎ活動を継続す
る仕組みへ

スクールサポーター
による支援

日課統一により、初等部
と高等部の環境変化の
緩和

(3)学校を核とした
地域協働の推進

ふるさと学習の校
外活動が取り組み
やすくなるよう改善

学校運営協議会の
役割の拡充

地域協働の核として
学校応援団の充実

(4)日課と学校
行事の検討

初等部、高等部
の授業時間を統一

学校行事の精選

(1) 持続可能な”ふるさと学習”へ改善

《現状と課題》

信濃町の恵まれた自然や歴史文化を題材とする「ふるさと学習」は、児童生徒の学習意欲や社会を生き抜く心を育むために有効である。継続した取り組みには次の課題がある。

- ① 教職員の人事異動によって、ふるさと学習の理念の共有が難しい。
- ② 信濃町には、恵まれた地域資源が多くある。厳選した教材づくりに取り組む必要がある。
- ③ 学校支援の人材登録名簿「しなの学校応援団」への登録者が減少している。
- ④ 学校日課と路線バスの運行時間の制約があり、柔軟なふるさと学習の時間確保が難しい。



(1)ー① 自立に向けた資質・能力を身に付ける学習

教科書がなくなった時に、どう学び続けるのか？

- ・学校卒業後、明確な正解のない社会の中でも、自ら考え自ら行動できる自立した社会人として、成長を続けられること
- ・家族や地域に支えられた経験から、与えられた役割を自らが理解し、地域社会へ貢献する喜びを感じられること

現状

与えられる自信

学校生活の中では、テストの成績や部活で結果を他者と比較され客観的に評価される事が多く、自己評価も他者と比較した自分を物差しにすることが多い。

問題点

夢や希望が持てない

努力しても叶わないことが多くあり、自分の成長に気づけず、成長を喜ぶ機会が少ない。
「がんばってもダメだ」と自信を喪失してしまい、将来の夢や希望が持てない。

望む姿

逆境から立ち直り成長する

- ①ピンチをチャンスに変える発想力
- ②どうすれば解決できるか考える課題解決力
- ③問題がどこにあるか分析する分析力
- ④課題解決のための具体的なアクションができる行動力
- ⑤他者と目的を共有し達成することの喜びを共有できる共感力

対策

自ら得る自信

学び合い、支え合える友だちと一緒に知らないことを調査してまとめ発表ができる学習。
多様な価値観や人に触れながら自らの成長を感じられる学習。

(1)ー(2) ふるさと学習によるキャリア教育

新学習指導要領において、児童生徒が「学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特性に応じて、キャリア教育の充実を図ること」について明示される。

自分の人生を構成する「キャリアデザイン力」の育成



キャリア教育の学びの視点

発達段階に応じた「3つの理解」に係る学びを繰り返す

自己理解

- ・自己の成長を実感することで、自分の得意なこと、好きなこと、努力すべき点を理解する

他者理解

- ・協働することの意義を実感することで、人間の生き方の多様性と可能性を理解する

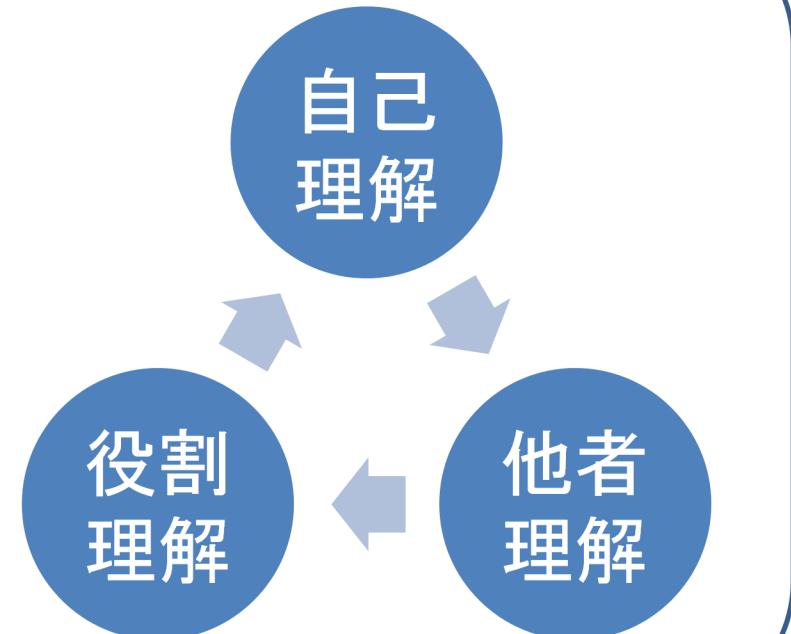
役割理解

- ・社会(集団)の中の自分や他者の役割を実感することで、職業(仕事)を通して社会と関わることが、自分らしく生きる人生につながることを理解する

自己
理解

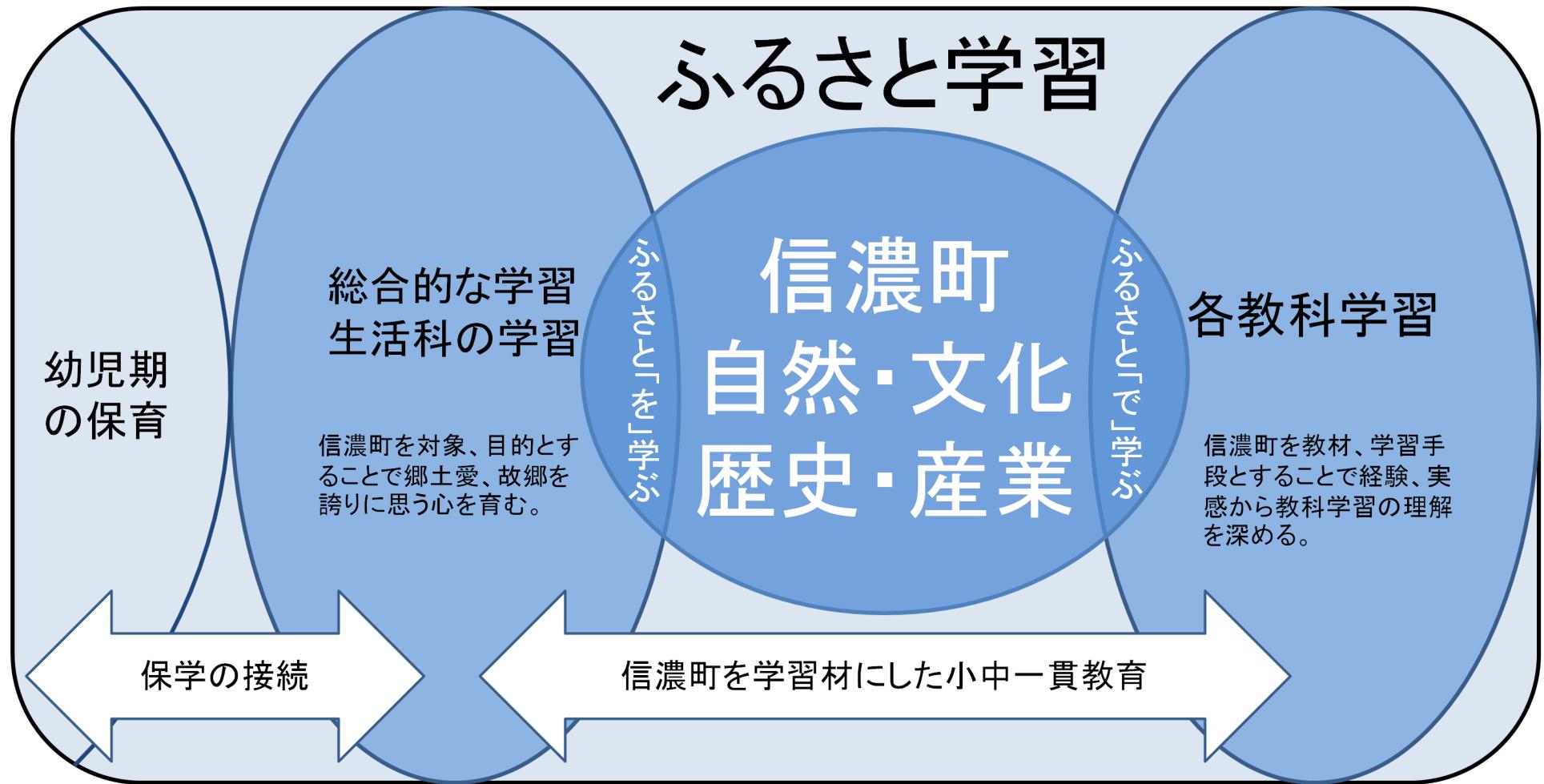
役割
理解

他者
理解



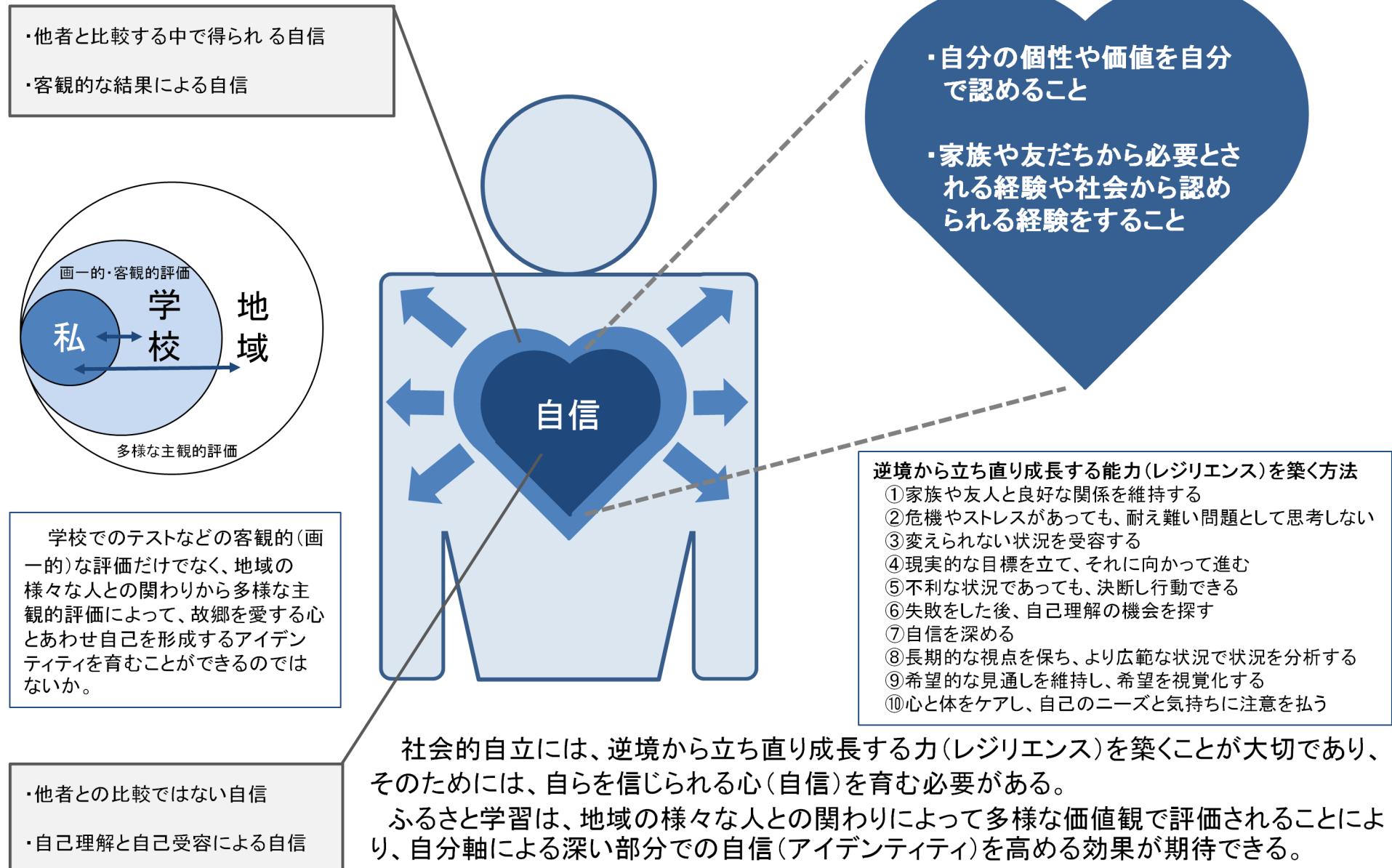
※長野県キャリア教育ガイドライン参照

(1)–③ ふるさと学習の定義

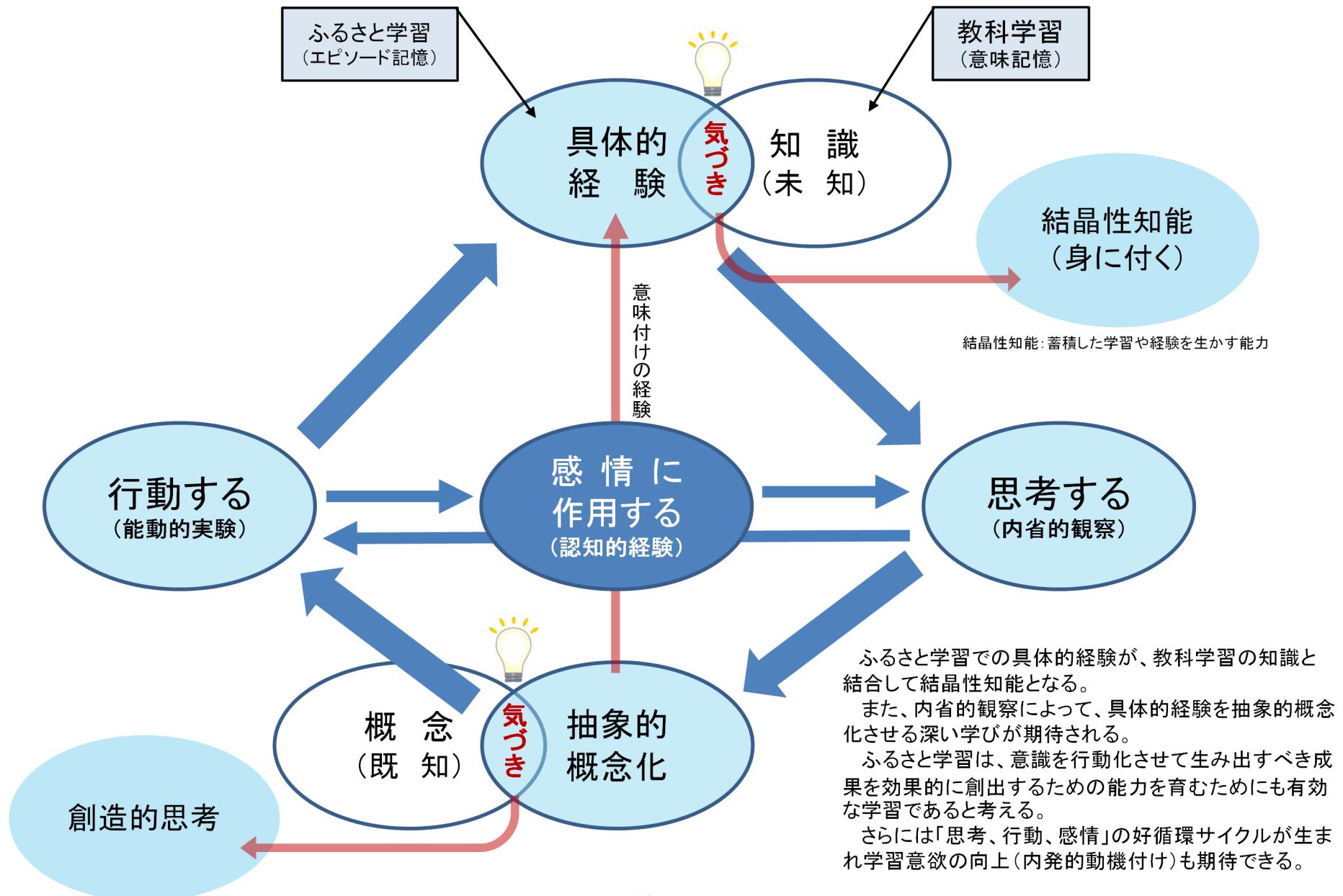


- ① ふるさと学習を全教育活動の基盤とする。
- ② 1年生、2年生の生活科と3年生以上の総合的な学習では、信濃町を学ぶ対象、目的として郷土愛や故郷に誇りを持つ心を育む。
- ③ 信濃町のふるさと学習で身に付けた探求的な学びは、各教科の理解を支える力になる。

(1)ー④ 「ふるさとを学ぶ」ことで期待する子どもの姿

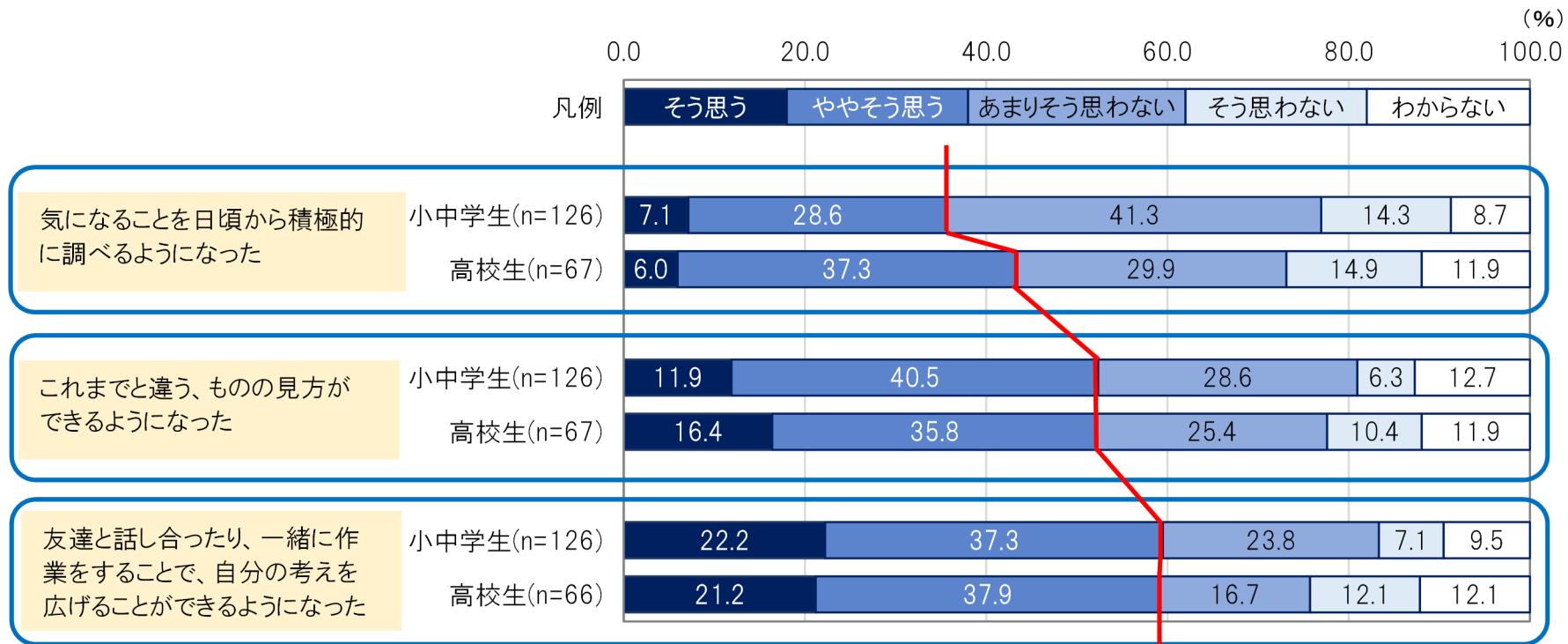


(1)–⑤ 「ふるさとで学ぶ」ことで期待される学習面での効果



(1)–⑥ ふるさと学習の成果

ふるさと学習について 中学生・高校生への意識アンケート (平成30年度実施)



- ・ふるさと学習を通じて、地域のことで新たに分かったことが「あった」と回答した中学生は54.6%である。
- ・「信濃町について関心がある、もっと知りたいことについて」の設問では「特はない」が45.3%と最も多く、次いで「動植物」18.5%である。
- ・ふるさと学習を通じた自身の変化は、「これまでと違うものの見方ができるようになった」「友達と話し合ったり、一緒に作業をすることで、自分の考えを広げることができるようにになった」に「そう思う」「ややそう思う」と回答した者が半数を超えている。
- ・ふるさと学習による自身の変化について、中学生の回答と16歳～18歳(高校生)の回答とを比較すると、「これまでと違う、ものの見方ができるようになった」「友達と話し合ったり、一緒に作業をすることで、自分の考えを広げることができるようにになった」については、概ね同様の傾向がみられる。
- ・「気になることを日頃から積極的に調べるようになった」については、中学生よりも高校生の方が「そう思う」「ややそう思う」と回答した者が多く、ふるさと学習が自ら学ぶ意識を身につけることに寄与する可能性がある。

(1)ー(7) ふるさと学習を持続可能とするための提案

学年	各学年での重点目標(願う姿)	野尻湖ナウマンゾウ博物館	一茶記念館	その他
年長	生活や遊びの中で一つの目標に向かい力を合わせて活動し、達成感や充実感を味わう子ども	小動物の飼育	一茶カルタ	周辺のお散歩
1年	信濃小中学校が大好きな子ども		一茶カルタ(国・生)	
2年	信濃小中学校のまわりの地域が大好きな子ども		俳句づくり(国)	
3年	信濃町のいいところを実感する子ども	昆虫と植物(理)	一茶俳句学習(総)	町内巡り(社)
4年	信濃町の食や人に感謝の気持ちをもつ子ども	クリーンラリー(総・理)	一茶まつり(音)	米作り(総)
特支	信濃町とつながる子ども	地域で生活するためのスキルと関わりを持つ個別の指導計画		
5年	信濃町の環境に興味をもつ子ども	流水の働き(理)		合同キャンプ
6年	信濃町の歴史に興味をもつ子ども	石器時代(社) 地層の見学(理)	江戸時代(社)	町議会傍聴(社)
7年	信濃町の人と生きる子ども	火山と地震(理)	俳句づくり(国)	合同キャンプ
8年	信濃町で働く人と生きる子ども	動物の体のつくり(理)		職場体験(総)
9年	信濃町に暮らすことに誇りをもつ子ども			ふるさと学習のまとめ発表(総)

- ① 総合的な学習における各学年の重点目標(願う姿)の共通認識を図る
- ② 過去の実践を「足跡カード」として集約・整理して次年度以降の学習の参考とする
- ③ しなの学校応援団の名簿の維持管理だけでなく校内のコーディネーターを中心とした地域連携の仕組みを構築する
- ④ 校外学習が推進されるよう日課と学校行事を見直しする
- ⑤ 年数回、学校と野尻湖ナウマンゾウ博物館、一茶記念館で「ふるさと学習」の打合せをする

(1)ー⑧ ふるさと学習をとおして育む子どもの姿

新学習指導要領	ふるさと学習
主体的・対話的 で深い学び	<ul style="list-style-type: none">◆自らの問い合わせを設定する◆相互作用から生み出す◆試行錯誤のプロセス から学ぶ



生まれ育った故郷への感謝と誇りを持ち、
主体的に自らの地域を考え、支えられる人材

(2) 新たな特別支援体制の構築

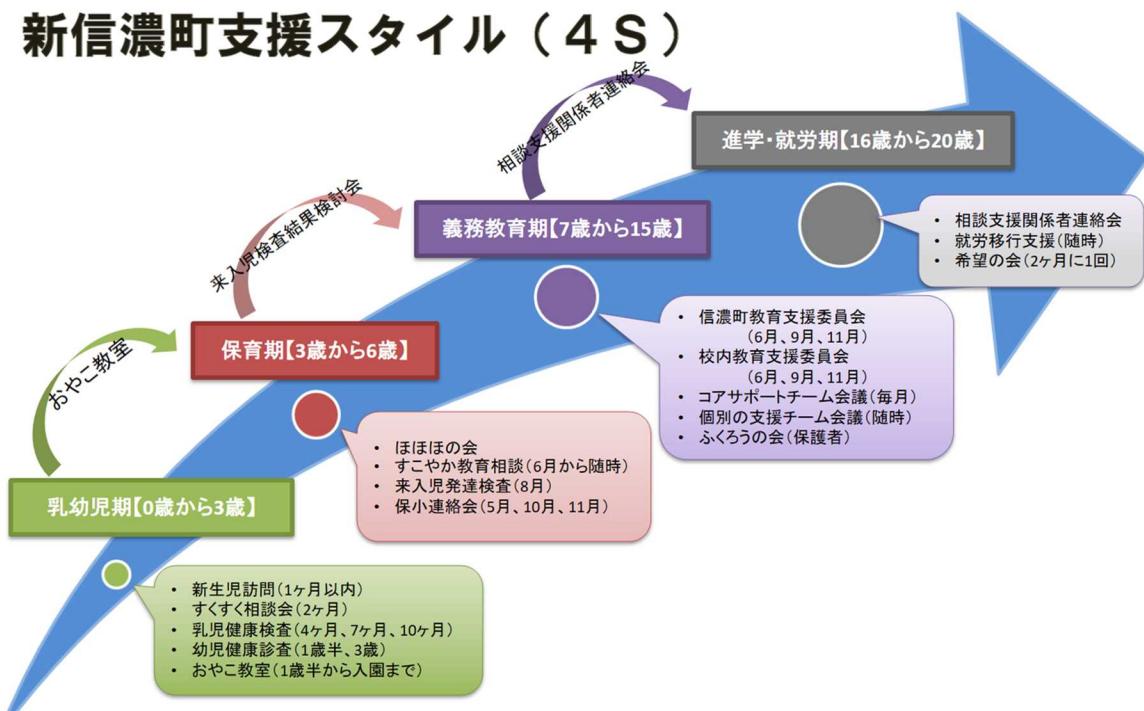
《状況と課題》

教育委員会による妊娠から就労まで一貫した支援を行うための理念として、新信濃町支援スタイル(4S)が平成25年に策定された。これによって保護者の障がい理解や学校の支援体制が充実した一方で、次のような状況と課題がある。

- ① 自閉症・情緒障害学級(以降「自・情障害学級」と表記する。)の在籍率が、国や県の平均を大きく上回っている。
- ② 令和元年度から県教育委員会が推進する信州型ユニバーサルデザインのモデル校として通常学級での※ユニバーサルデザインの取り組みがなされている。
- ③ 集団不適応や様々な事情によって登校できない児童生徒が約10名いるが、発達障害をはじめとする個に応じた支援体制が構築されていない。

※ユニバーサルデザイン:

全ての児童生徒にとって分かりやすく、取り組みやすい授業や生活方法を考慮した指導・支援方法のこと。

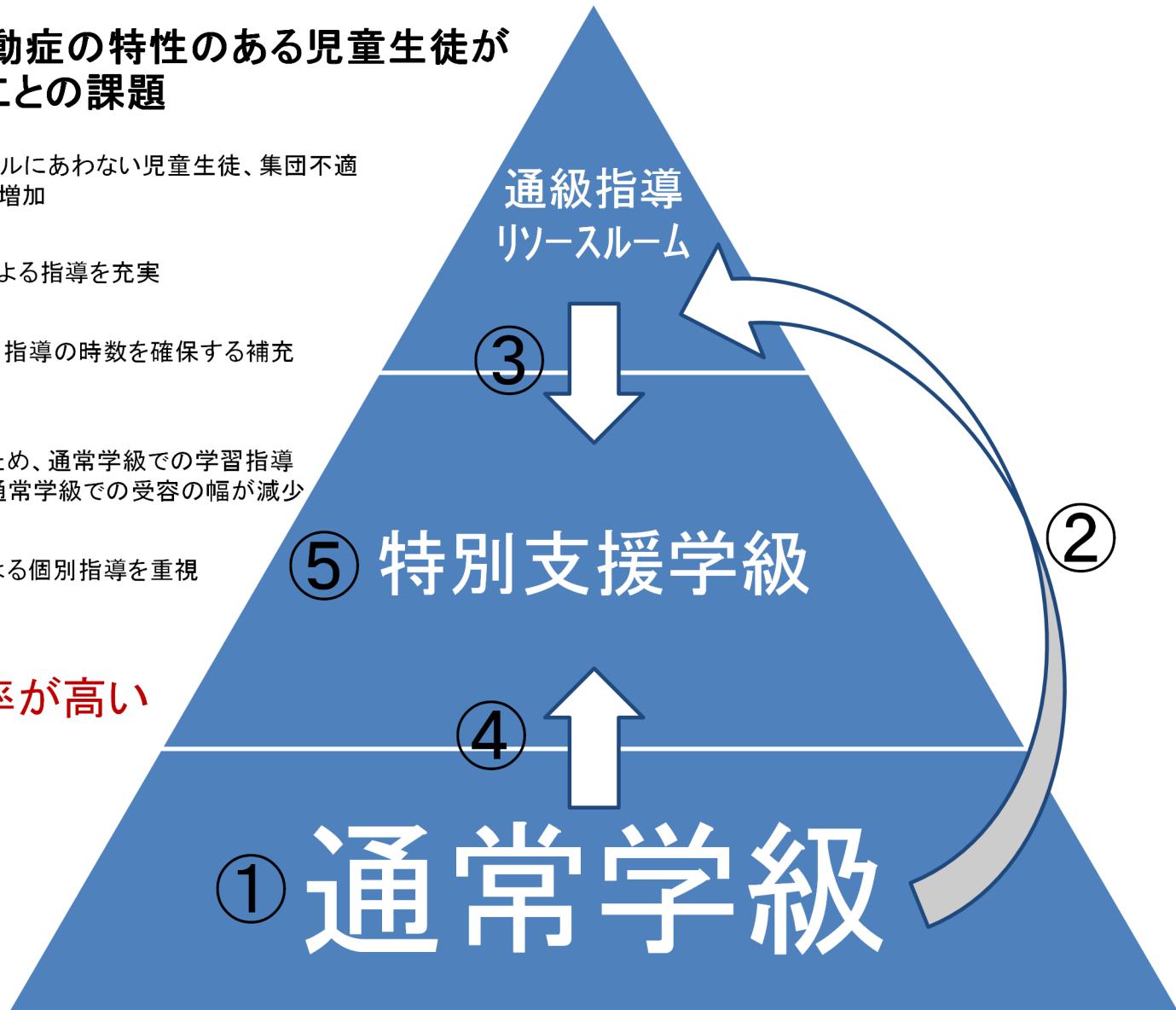


(2)－① これまでの特別支援教育の取り組みの課題

学習面の遅れや注意欠如・多動症の特性のある児童生徒が
特別支援学級に在籍していることの課題

- ① 通常学級での一斉指導形態による授業スタイルにあわない児童生徒、集団不適応によって教室で勉強ができない児童生徒が増加
- ② リソースルームと通級指導教室で個別学習による指導を充実
- ③ 週8時間以上の個別学習が必要な場合、個別指導の時数を確保する補充支援のため特別支援学級へ入級
- ④ 個別学習と特別支援学級の支援が充実したため、通常学級での学習指導から特別支援や個別指導に頼るようになり、通常学級での受容の幅が減少
- ⑤ 通常学級に戻していく指導よりも特別支援による個別指導を重視

特別支援学級の在籍率が高い



(2)–(2) 文部科学省初等中等教育局長756号通知の区分・種類

区分・種類	特別支援学級	通級による指導
知的障害者	知的発達の遅滞があり、他人との意思疎通に軽度の困難があり日常生活を営むのに一部援助が必要で、社会生活への適応が困難である程度のもの	利用対象とならない
自閉症者	自閉症又はそれに類するもので、他人との意思疎通及び対人関係の形成が困難である程度のもの	自閉症又はそれに類するもので、通常の学級での学習におおむね参加でき、一部特別な指導を必要とする程度のもの
情緒障害者	主として心理的な要因による選択性かん默等があるので、社会生活への適応が困難である程度のもの	主として心理的な要因による選択性かん默等があるので、通常の学級で学習におおむね参加でき、一部特別な指導を必要とする程度のもの
学習障害者	学習障害や注意欠如・多動性障害の診断だけでは、入級の対象とならない	全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの学習と使用に著しい困難を示すもので、一部特別な指導を必要とする程度のもの
注意欠如・多動性障害者		年齢又は発達に不釣り合いな注意力、又は、衝動性、多動性が認められ、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすのもので、一部特別な指導を必要とする程度のもの

※ 長野県の特別支援学級在籍率は全国1位であることから通級指導教室の設置を推進している。
これまでの入級判断と個別支援の在り方について見直しが求められている。

(2)–(3) 特別支援教育の見直しによって配慮すべき事項

通常学級

(すべての児童生徒への支援)

- ① 学習障害による学習の遅れだけでは、特別支援学級入級の対象とならない。通常学級での分かりやすい授業改善がこれまで以上に求められる。
- ② 注意欠如・多動症のある児童生徒による授業中の立ち歩きや教室の飛び出しなどの対応が、通常学級でこれまで以上に求められる。
- ③ 集団不適応の児童生徒が増加しないよう温かく受容的な関わりが求められる。

適応指導

(リスクの高い子への支援)

- ① 不登校児童生徒への対応は、校内外中間教室の設置、アシストルームの利用へと段階的に児童生徒の状況に応じた柔軟な支援が求められる。
- ② 集団への不適応が生じた児童生徒に対しては、アシストルームでの小集団によるスキルトレーニングが求められる。

通級指導

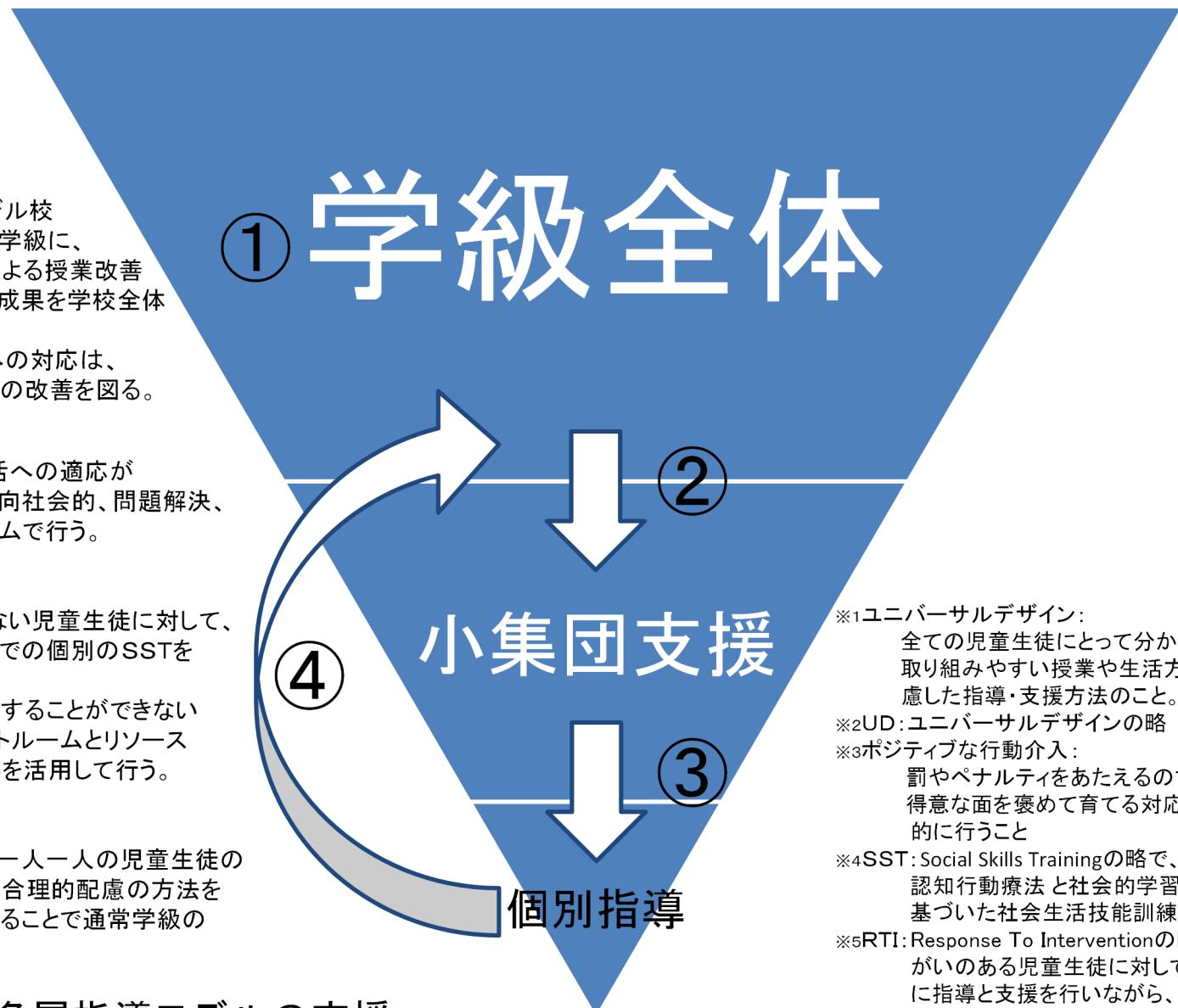
(より専門的な支援)

- ① 週当たり1~8時間相当の指導により通常学級への適応を高めるための指導が目的である。教科学習の補充の場とならないよう注意が必要となる。
- ② 障害の程度によっては、個別指導が必要な児童生徒が一定数存在することを理解した上で、リソースルーム担当職員と連携しながら学習に対してポジティブな感情を育む支援が求められる。

(2)–④ 三層構造による多層的な指導モデル

- ① 信州型ユニバーサルデザインのモデル校として通常学級のうち1クラスをモデル学級に、
※1ユニバーサルデザイン(以下UD)による授業改善に取り組む。※2UDによる授業改善の成果を学校全体へと汎化させる。(学習面の支援)
注意欠如・多動症のある児童生徒への対応は、
※3ポジティブな行動介入によって行動の改善を図る。(行動面の支援)
- ② 通常学級での適切な行動や集団生活への適応が苦手な児童生徒に対して、小集団での向社会的、問題解決、学習態度などの※4SSTをアシストルームで行う。(行動面の支援)
- ③ 小集団での支援でも改善が見られない児童生徒に対して、より専門的な支援として通級指導教室での個別のSSTを行う。(行動面の支援)
集団不適応により、通常学級で学習することができない児童生徒への学習保障として、アシストルームとリソースルームが連携して個別学習をICT機器を活用して行う。(学習面の支援)
- ④ 通級指導教室とリソースルームでの一人一人の児童生徒の障がいをアセスメントし、通常学級での合理的配慮の方法を検討する。検討結果をフィードバックすることで通常学級のUDがさらに促進される。

※5 RTIによる多層指導モデルの支援



※1ユニバーサルデザイン:
全ての児童生徒にとって分かりやすく、取り組みやすい授業や生活方法を考慮した指導・支援方法のこと。

※2UD:ユニバーサルデザインの略

※3ポジティブな行動介入:
罰やペナルティをあたえるのではなく、得意な面を褒めて育てる対応を集中的に行うこと

※4SST:Social Skills Trainingの略で、認知行動療法と社会的学習理論に基づいた社会生活技能訓練のこと

※5RTI:Response To Interventionの略で、障がいのある児童生徒に対して、徐々に指導と支援を行いながら、その時の効果を見定めていき、より必要な支援を客観的に判断していく方法

(2)–(5) 包括的指導のための方針の共有

※1ポジティブな行動介入：

罰やペナルティをあたえるのではなく、得意な面を褒めて育てる対応を集中的に行うこと

※2価値的行動を学ぶ：

本人の力量に見合い、かつ周囲と折り合えるような行動

対人関係力を身につける

学習場面
での協働
学習

通常学級での
※1ポジティブ
な行動介入

※2価値的行動を学ぶ

①

助け合うことを学ぶ

生活場面
での共同
支援

②

関係職員の指
導方針を共有
する場の設置
(コアサポート会議)

②

スキルを身につける

通級指導教
室での社会性
と情動の
学習

①個人の成長に焦点を当て、望ましい価値観と行動を理解を身につけさせ、個別指導によって望ましい行動と感情のコントロール方法など具体的なスキルを学ぶ。

②個人として学んだ価値観やスキルを集団での学習場面や生活場面で活用しながら※1ポジティブな行動介入によって行動変容を促す。

個の成長と集団での成長が相互作用し合いながら全人的成長となるよう指導することを目指す。

そのためには、不適切な行動の多い児童生徒に対して、包括的な指導をおこなうために指導方針を共有するための場が重要となる。

そこで、現在行われているコアサポート会議をさらに役割を明確化し、専門的な外部からのアドバイスを受けながら蓄積された客観的数据と心理的なエビデンスに基づく支援ができるよう体制強化を図る。

(2)–⑥ 三層構造による多層的な教育支援による役割の変更

【通常学級担任】

通常学級でのユニバーサルデザインの授業改善の取り組みとポジティブな介入でポジティブな行動を増やす指導を行う。

【学習支援員】

1、2年生は学級に1名。3、4年生は学年に1名の学習支援員を初等部チームティーチングとして配置。

通常学級での立ち歩きなどの不適切行動に対して個別支援しながら学年や学級の状況に応じて柔軟に学習支援を行う。また特別支援学級での生活支援員としての役割も兼ねる。

【通級担当】

通常学級での適応を高めるための個別のSST指導を行う。

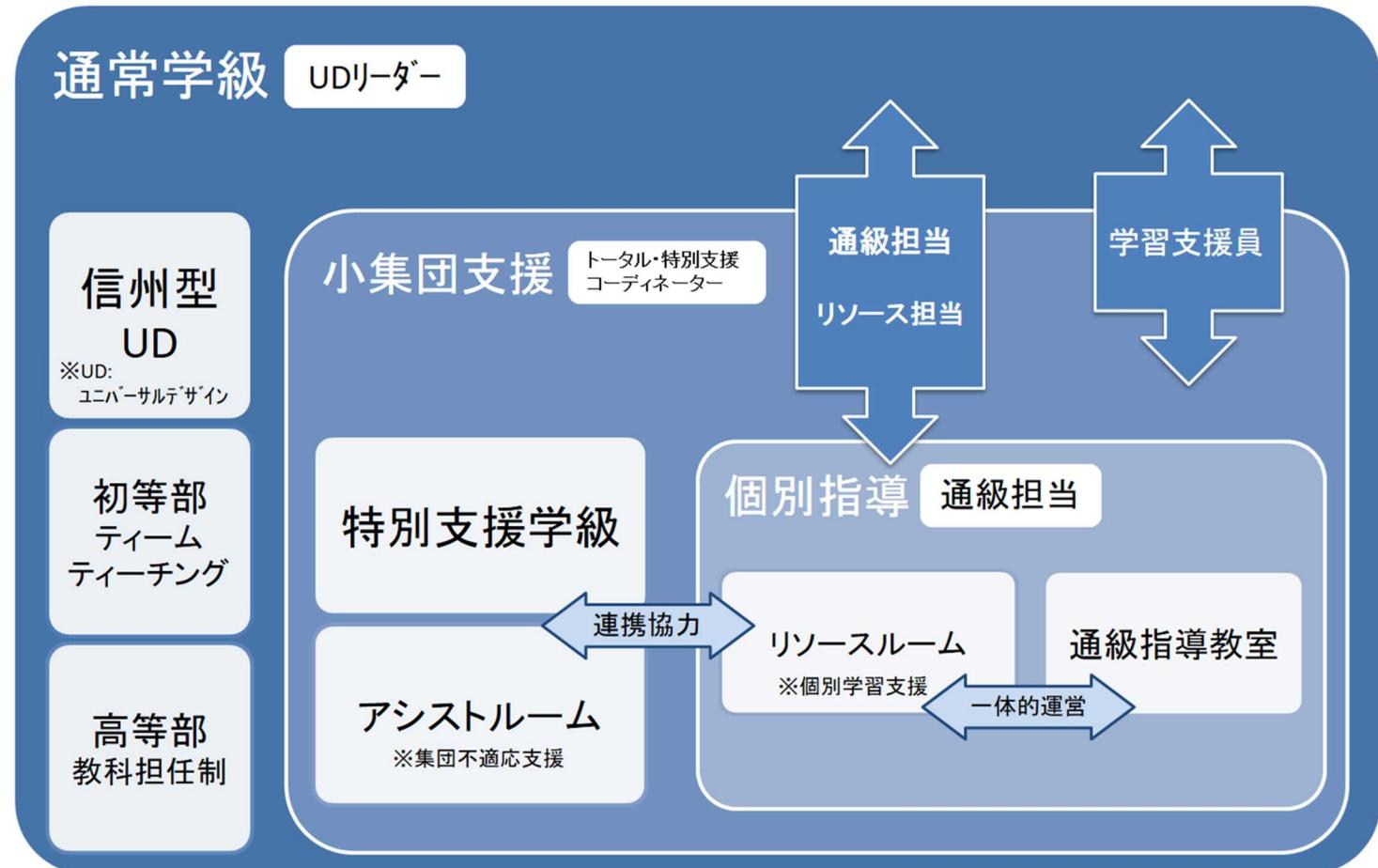
教科学習の補充目的による指導は行わない。信州型UDによる多層指導モデルMIMの取り組みをUDリーダーと連携して行う。

【リソース担当】

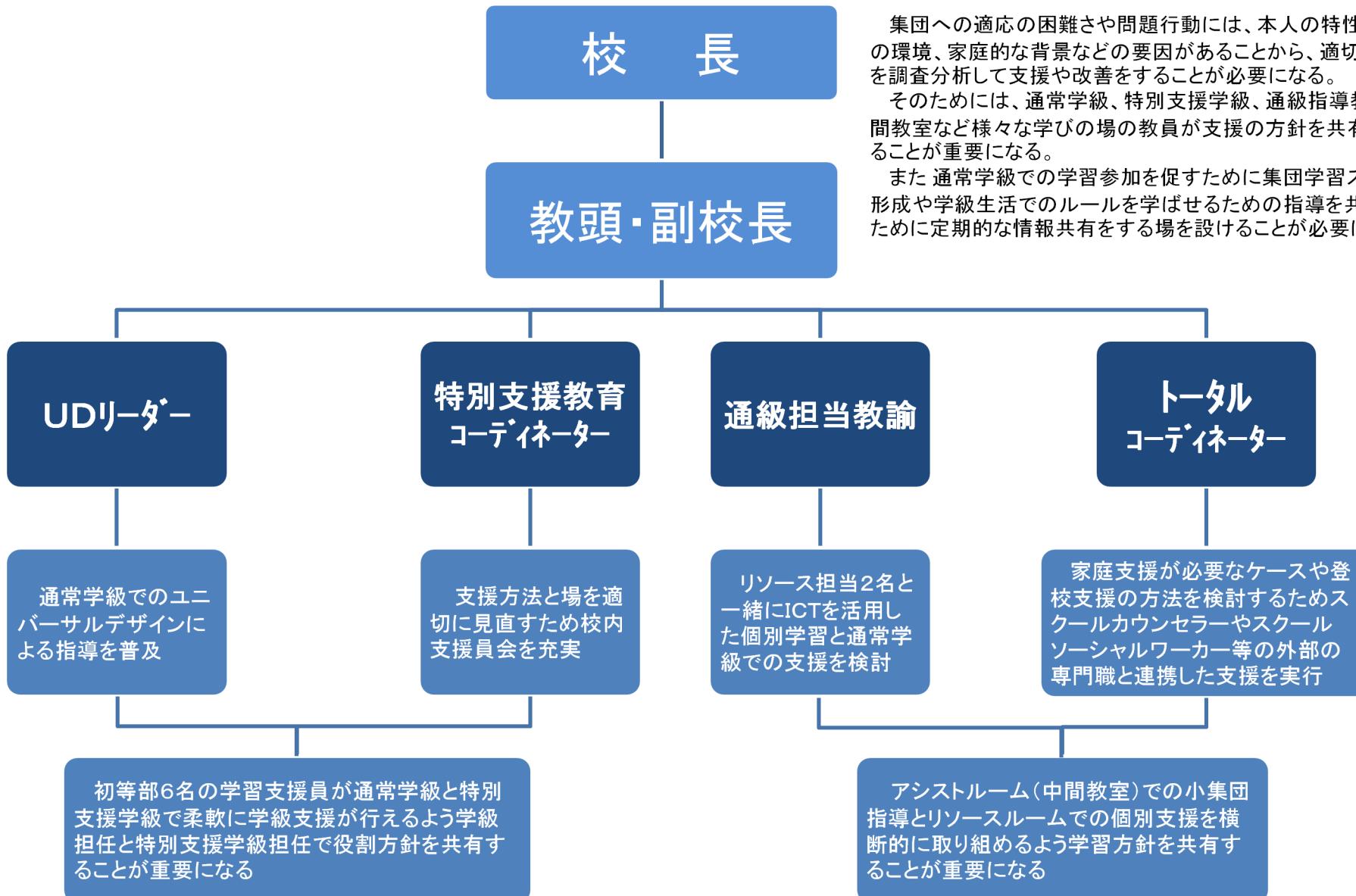
高等部を中心に通常学級での個別の学習支援を行う。

通級担当と協力した一人一人の学び方の苦手さをアセスメントして、通常学級での合理的配慮をフィードバックする。アシストルームでの不適応児童生徒の学習保障と、LD児童生徒の学び直しの個別学習をICT機器を活用して行う。

「集団不適応に対する指導」と「学習障害に対する支援」を同一の問題としてとらえながらRTIによる多層的な支援データーと理論に基づき行う。



(2)–(7) 校務分担のイメージ

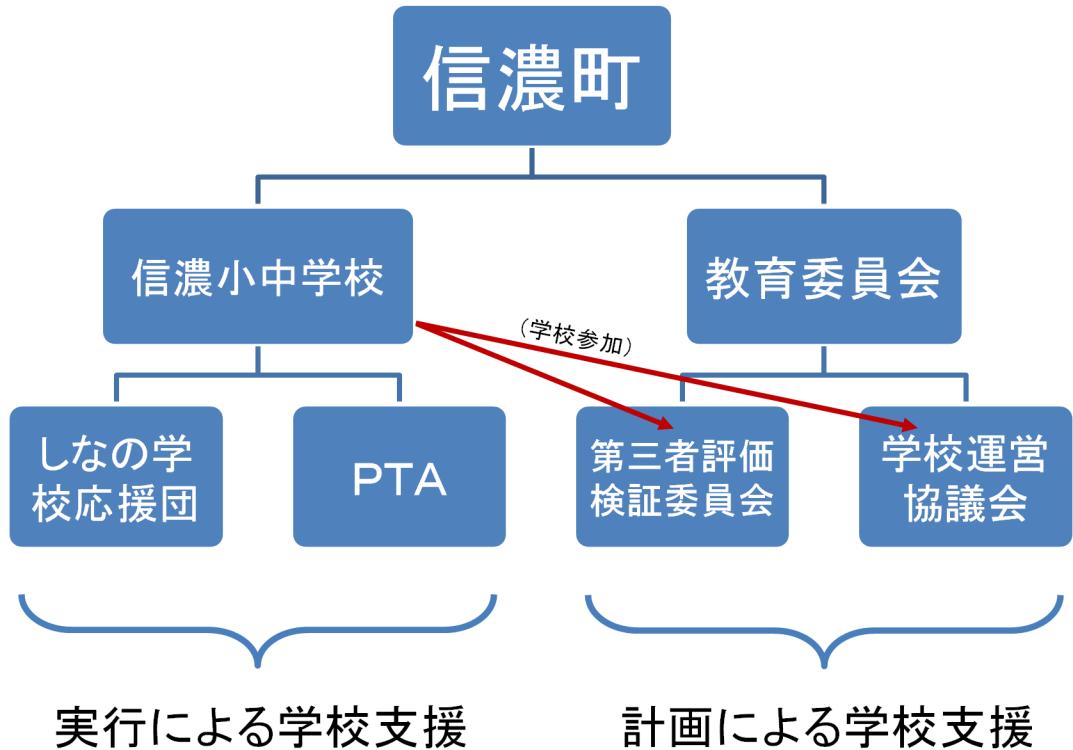


(3) 学校を核とした地域協働の推進

《状況と課題》

学校と地域をつなぐ仕組みについて
次の状況と課題がある。

- ① 信濃小中学校の学校運営協議会の発足は、県が推進する信州型コミュニティースクール(信州型CS)の前だった。そのため教育委員会事務局が主体で運営する仕組みとなっている。
- ② しなの学校応援団は、クラブ活動等の講師依頼の人材バンク名簿として残っているが、学校を主体とする信州型CSとしての活発な地域連携の役割として機能していない。
- ③ 教職員の働き方改革に取り組むためには、部活動支援をはじめ地域人材の活用が必要不可欠である。
- ④ ふるさと学習を推進するためには、地域と学校を持続的につなぐ役割が必要である。

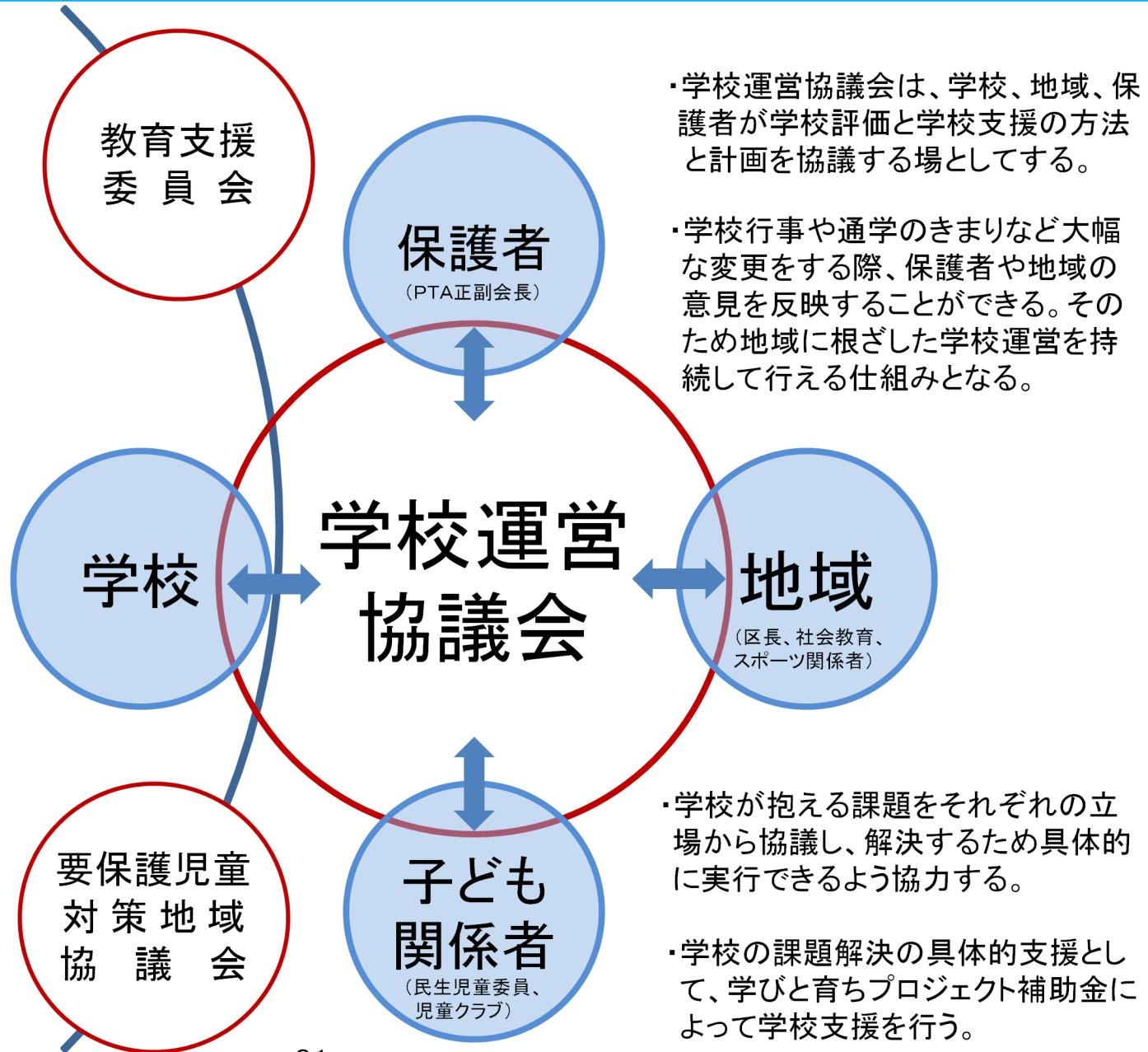


(3)ー① 学校運営協議会の役割を見直し

教育委員会

教育支援委員会(特別支援教育の関係者)や要保護児童対策地域協議会(児童虐待対策の関係者)など教育委員会事務局が開催する各種の会がある。

学校運営協議会もそれらの一つとして開催されている。



(3)－② 学校運営協議会による上下校の見守り

令和元年度から地域協働の具体的な取り組みの一つとして、学校運営協議会を中心に計画をした上下校の見守り活動がスタートしている。

今後は、しなの学校応援団でのスクールソーラーやスクールガードの活動を活発化させながら、学校を核とした対話と協働の地域づくりを目指す。

お散歩しながらボランティアしませんか？

子ども見守り隊を募集しています

子ども見守り隊のベストを着てお散歩やお買い物をしながらボランティアいただける方を4名募集しています。

ボランティアは、ながら見守りで上下校の子どもの安全啓発をしていただくお手伝いになります。

夜光反射板が付いている蛍光カラーのベストなので、お散歩時のご自身の交通安全にも役立ちます。

ご協力いただける方は、信濃小中学校事務室(電話 255-2373)までご連絡ください。



ベストの色は蛍光グリーン

子ども達の見守りをお願いします

下校放送が始まります

10月から毎日午後3時15分と午後5時に児童、生徒の帰宅をお知らせする放送を行います。

この放送は、地域の皆さんに児童、生徒の下校時刻をお知らせし、地域全体で子ども達を見守ることを目的としています。

また、それに併せて午後5時のチャイムを「夕焼け小焼け」の音楽に変更します。下校の放送が流れましたら、子ども達の見守りにご協力をお願いします。

(3)ー③ 学校運営協議会による学校補助金



教育委員会

《学校と教育委員会が抱える課題》

- ① 合同部活の開始と働き方改革を踏まえて、保護者が主体となった部活動運営がしやすい仕組みづくりが必要である。
- ② ふるさと学習を推進する上で学級担任がより柔軟に取り組める予算措置が必要である。
- ③ 義務教育学校としての教職員研修や学校公開が取り組むための指導と予算措置が必要である。

学校運営協議会

《学校運営協議会による支援》

- ① 教育委員会から学校運営協議会へ補助金交付することで、地域と保護者の意見を反映した具体的な学校支援を行う。
- ② 学校運営協議会が核となった地域協働で地域の課題解決を計画して、それぞれの立場で行動する。

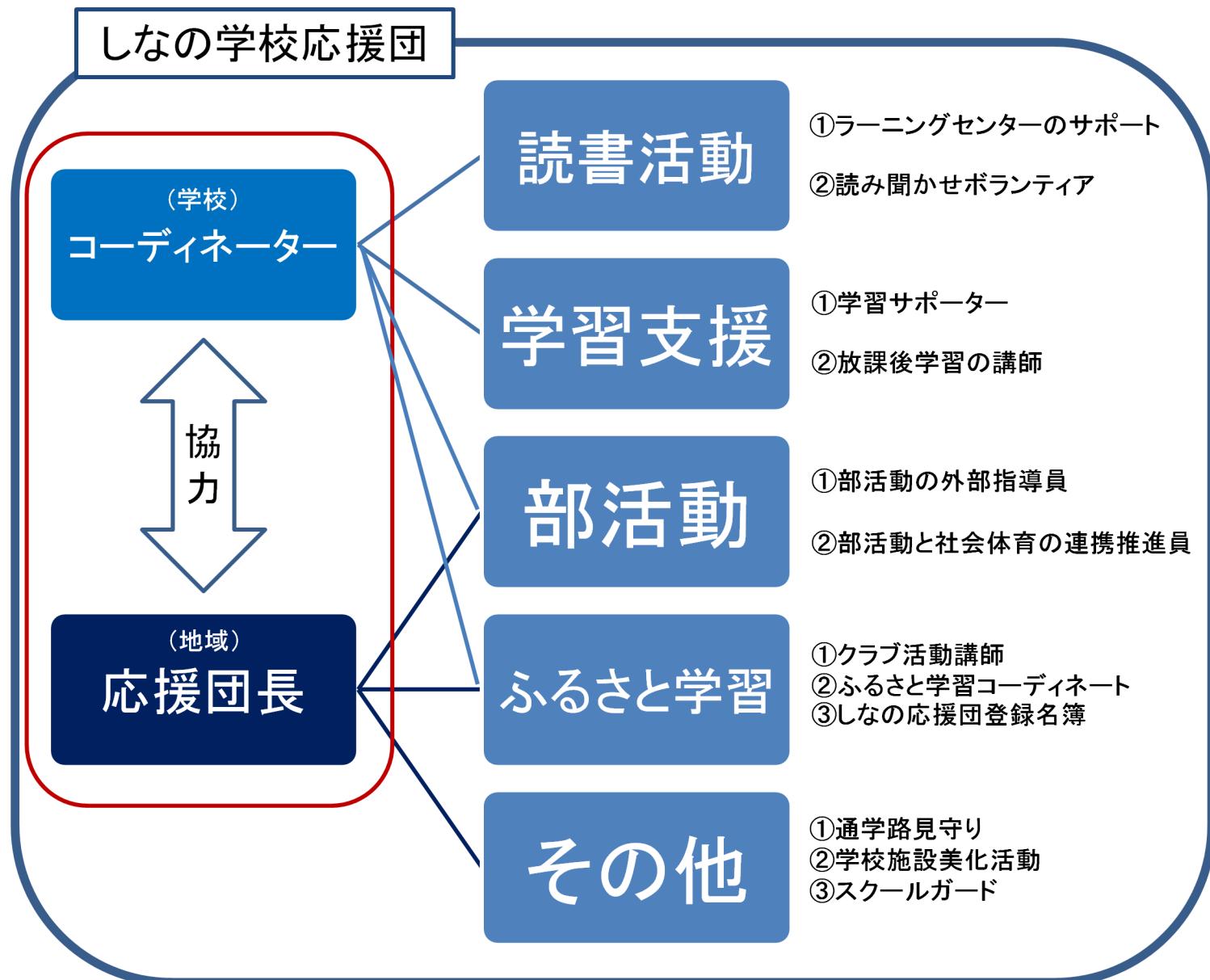
信濃小中学校

《学校課題の解消》

- ① 教育委員会と学校運営協議会との意見交換をもとに、学校の課題解決を計画的に意図的に行える。
- ② 部活予算を補助金化することで部ごとの柔軟な活動ができるようになり、保護者会が主体となった部活動の運営が行いやすくなる。
- ③ ふるさと学習の校外活動に係る煩雑な事務手続きが簡素化される。
- ④ 学校公開や教職員研修がこれまで以上に充実できる。

(3)–(4) しなの学校応援団の活性化

- ① 校内に地域連携コーディネーター（以下「コーディネーター」という。）を任命する。コーディネーターは、地域ボランティア（スクールサポーター）が、読書活動や学習支援を行えるよう体制構築をする。
- ② コーディネーターのみでの「しなの学校応援団」の運営では、教職員の人事異動によって継続的な地域学習の取り組みが困難になることが予想される。
- ③ 継続的に学校と関わりが持てる地域の応援団長を任命し、コーディネーターと協力して信州型コミュニティースクールとして「しなの学校応援団」を位置づける。これにより「ふるさと学習」や「部活動指導」の場面が地域人材の出番と活躍の場となる。
- ④ 地域づくりの核としての役割を学校が担いながら地域に開かれた学校づくりを行うために、将来的には、空き教室の一室を地域へ開放しながらボランティアセンターとしての機能を持たせることで、日常的に地域からの学校支援が期待できる。

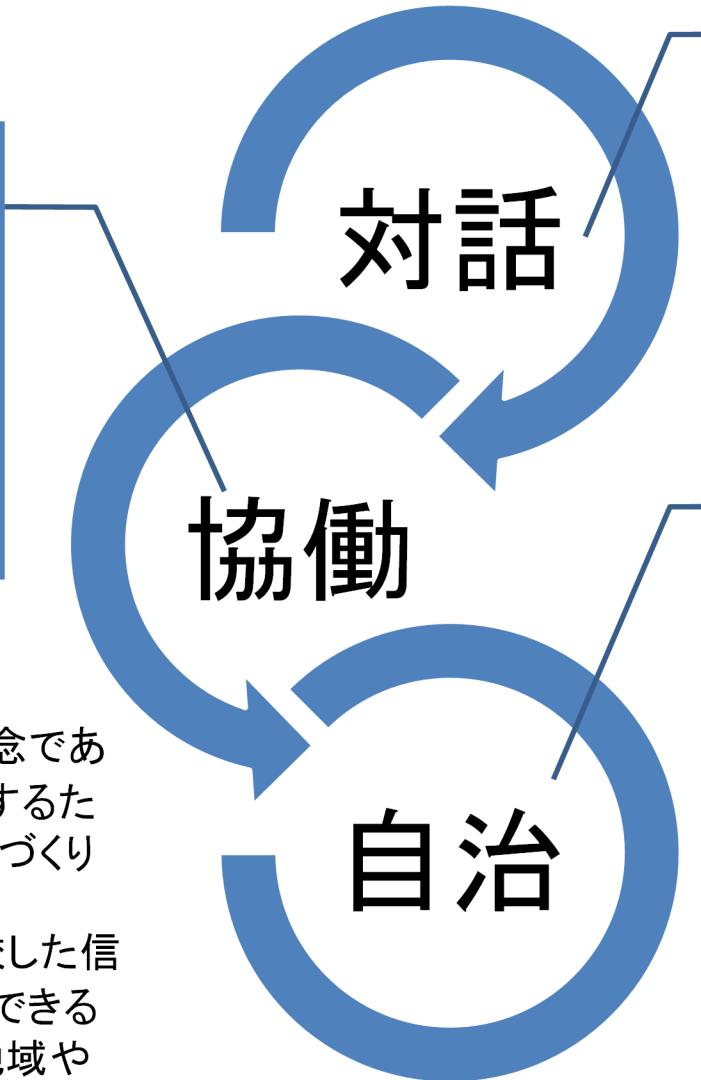


(3)ー(5) 学校を核とした地域協働のスクールコミュニティー

対話から共有された願うべき子ども像を育てるために、しなの学校応援団によって、主体的に地域住民が協働できる所属の場をつくる。
またボランティアセンターを校内に設置し、日常的な関わりの中で地域の子どもを地域が育てる環境づくりへつなぐ。

信濃町第6次長期振興計画の理念である「対話と協働のまちづくり」を実現するため、地域全体が子どもを育てる環境づくりの核となる。

町民の期待と希望を実現して開校した信濃小中学校への願いを持続可能にできるスクールコミュニティーとなるよう、地域や保護者と一緒に対話と協働による学校づくりを目指すことが大切となる。



学校運営協議会の場で、地域、保護者、学校が、さまざまな立場と価値観によって対話をする。
対話から学校運営の方針と願うべき子ども像を共有し、地域協働による学校づくりへつなぐ。

平成24年の小中一貫教育校開校時の願いと希望を持続可能にするため、学校と地域が一体となり、子どもを取り巻く様々な課題を様々な立場と価値観で一緒に考え、解決できる学校づくりを目指す。

(4) 日課と学校行事の検討

《状況と課題》

施設一体型の小中一貫教育校であるが、初等部の授業時間が45分、高等部の授業時間が50分と日課が異なっている。

次のような状況と課題がある。

- ① 学校日課が初等部と高等部の2種類あるため、全校一斉の活動を柔軟に行えない。
 - ② 学校運営が複雑になり、人事異動で来た職員が慣れるのに時間がかかる。
 - ③ 5年生で高等部日課へ変更となることから、適応性の低い児童に特別な支援を必要とする。
 - ④ 小学校と中学校の行事をそれぞれ行うため、学校全体の行事が多い。
 - ⑤ 冬期間の登下校通学対策として冬日課は、授業時間が5時間となる。

信濃小中学校 日課表										
1~4学年										
月	火	水	木	金						
職員朝会	読書 (10分)		ドリルタイム							
	学活(20分)									
	移動(5分)									
	8:50									
	1校時 (45分)									
	9:35									
	移動 (5分)									
	9:40									
	2校時 (45分)									
	10:25									
	初等部活動 (10分)									
	10:35									
	休み時間 (15分)									
	移動 (5分)									
	10:55									
	3校時 (45分)									
	11:40									
	移動 (5分)									
	11:45									
	4校時 (45分)									
	12:30									
給食・休み時間 (65分)										
給食・保健指導 12:30～12:50 (20分)										
休憩 12:50～13:35 (45分)										
	移動 (5分)									
	13:30									
	清掃 (15分)									
	集会 (15)									
	清掃 (15分)									
	移動 (10分)									
	13:50									
	14:00									
	5校時 (45分)									
	14:45									
	移動 (5分)									
14:50 4年 6校時 (45分) 15:35	14:50 3・4年 6校時 (45分) 15:35	学活(15分)	14:50 4年 6校時 (45分) 15:35	14:50 3・4年 6校時 (45分) 15:35						
		(下校 15:20)								
			移動 (5分)							
	14:50									
	6校時 (50分)									
	15:00									
	学活(15分)									
	(下校 15:20)									
	移動 (10分)									
	15:00									
	6校時 (50分)									
	16:45									
	職員会議									
	学年会									
	教科会									
	学活(15分)									
	(下校 16:20)									
	学活(15分)									
	(下校 16:20)									
	学活(15分)									
	(下校 16:20)									

④－1 初等部と高等部の授業時間を統一した学校日課(案)

信濃小中学校 通常日課表

共通 チャイム	月	火	水	木	金
8:10	職員朝会				
	読書(10分)				
	学活(初等部15分・高等部10分)				
	移動(高等部)				
	移動(5分)				
8:40					
	1校時(50分)				
	9:25				
9:30	深化の時間(初等部)				
	移動(10分)				
9:40					
	2校時(50分)				
	10:25				
10:30	深化の時間(初等部)				
	休み時間(15分)				
	移動(5分)				
10:50					
	3校時(50分)				
	11:35				
11:40	深化の時間(初等部)				
	移動(10分)				
11:50					
	4校時(50分)				
	12:35				
12:40	給食準備(初等部)				
	給食・休み時間(55分)				
	給食指導				
	初等部12:35～12:50(15分)				
	高等部12:40～12:50(10分)				
	休憩12:50～13:35(45分)				
	移動(5分)				
(13:50)					
	清掃(15分)	集会(15)		清掃(15分)	
13:50					
14:00					
	5校時(50分)				
	14:45				
14:50	深化の時間(初等部)				
	移動(10分)				
15:00					
	6校時(50分)	学活(15分)		6校時(50分)	
	(下校15:20)				
	15:40			15:45	
	15:45				
15:50	深化の時間(初等部)				
	移動(5分)				
	学活(15分)				
16:10					
	職員会議 学生会 教科会				
	学活(15分)				
	16:10				
	(下校 16:15)				
16:15					
	(下校 16:15)				
16:40					

信濃小中学校 冬日課表

共通 チャイム	月	火	水	木	金
8:10	職員朝会				
	読書(10分)				
	学活(初等部15分・高等部10分)				
	移動(高等部)				
	移動(5分)				
8:40					
	1校時(50分)				
	9:25				
9:30	深化の時間(初等部)				
	移動(10分)				
9:40					
	2校時(50分)				
	10:25				
10:30	深化の時間(初等部)				
	休み時間(15分)				
	移動(5分)				
10:50					
	3校時(50分)				
	11:35				
11:40	深化の時間(初等部)				
	移動(10分)				
11:50					
	4校時(50分)				
	12:35				
12:40	給食準備(初等部)				
	給食・休み時間(55分)				
	給食指導				
	初等部12:35～12:50(15分)				
	高等部12:40～12:50(10分)				
	休憩12:50～13:35(45分)				
	移動(5分)				
(13:50)					
	清掃(15分)	集会(15)		清掃(15分)	
13:50					
14:00					
	5校時(50分)				
	14:45				
14:50	深化の時間(初等部)				
	移動(10分)				
15:00					
	6校時(50分)	学活(15分)		6校時(50分)	
	(下校15:20)				
	15:40			15:45	
	15:45				
15:50	深化の時間(初等部)				
	移動(5分)				
	学活(15分)				
16:10					
	職員会議 学生会 教科会				
	学活(15分)				
	16:10				
	(下校 16:15)				
16:15					
	(下校 16:15)				
16:40					

- ①初等部と高等部の授業時間を50分に変更する。
- ②学校開始を8時10分、終了を16時40分に変更する。
- ③初等部は授業時間45分からの5分間を深化の時間として、担任の裁量の時間とする。
- ④授業の開始と終了に共通チャイムを鳴らす。



- ①統一日課によって全校行事が柔軟に取組める。
- ②初等部の深化の時間を有効に活用することで、学習効果が期待される。
- ③分かりやすい日課となることで、環境適応に苦手さのある児童生徒と、人事異動で来たばかりの教職員に分かりやすい学校となる。

④－2 学校行事の精選と地域参加への提案

学 校

運動会
文化祭

地 域

一貫教育のメリットを
大きくする

義務教育期の9年間の子どもの成長は、心身共に大きいことから学習活動と一緒にすることの難しさがある。

日常生活の場面では、自然な小学生と中学生の交流が図れている。

小学生にとっては具体的なロールモデルとし、中学生にとっては責任感が育まれている。

これまで施設一体型の小中一貫教育校として小学生と中学生の交流を目的とした学校行事を積極的に取り組んできている。

義務教育学校として9年間の系統性あるカリキュラムによって、信濃町の次代を担う人材育成が図れる学校行事の精選が必要である。

地域に開かれた学校行事

小中一貫教育校の良さである9年間の子どもの育ちを地域の方や保護者に知ってもらえる行事として運動会と文化祭がある。

運動会は小学生が主人公として活躍しながら中学生が運営をサポートする役割とする。

文化祭は、中学生が主人公となるような内容とし、小学生が祭りの盛り上げ役として、学校行事にかかる授業時間数を効率化できるのではないか。

二つの学校行事によって学校の良さを地域や保護者に知ってもらう好機会として捉え、より多くの人に子どもの成長を見てもらえるよう土曜日、日曜日の開催とすることが望ましい。そのための調整が必要である。

地域が支える一貫教育

学習指導要領の改定や教職員の働き方改革など学校を取り巻く情勢が変わってきた。

このような中、行事や学習方法について検討が必要になっている。(新学習指導要領の中で実社会・実生活との関わりを重視していることから総合的な学習の時間の4分の1程度まで、休業日等に実施できることになった。)

これまで以上に地域のサポートを得ながら学校を運営することが求められている。

教育委員会も町に唯一の学校である信濃小中学校と目指すべき子どもの姿を共有するため教職員に開校時の思いと願いを伝える研修が必要である。

5 提案を具体化するために今後検討すべき事項

(1) 持続可能な”ふるさと学習”へ改善

- ① 教科毎の小中の系統性を踏まえた一貫教育のカリキュラム作成の検討とあわせ、ふるさと学習を教科学習に活かせるよう検討が必要である。
- ② 継続的なふるさと学習とするため「しなの学校応援団」を学校主体で充実させるよう、地域をよく知るコーディネーターの配置が必要である。
- ③ ふるさと学習を学校だけでなく、保育活動でも取り入れながら幼保小接続をするための仕組みの検討が必要である。

(2) 新たな特別支援体制の構築

- ① 通常学級でのユニバーサルデザインによる学習と多層指導モデルによる指導について全職員への研修が必要である。
- ② 特別支援体制の変更に際しては、保護者への丁寧な説明が必要である。
- ③ 多層指導モデルの支援には、子どもの行動変容に対する専門的な調査分析ができる体制が必要である。

(3) 学校を核とした地域協働の推進

- ① しなの学校応援団がスクールサポーターとして学校支援をするための具体的な仕組みを学校主体で検討する必要がある。
- ② 学校を核とした地域協働の推進の方法を検討する中で社会教育委員との連携について検討が必要である。
- ③ 地域の中核(応援団長)となる人材を探しながら校内の居場所となる環境を整えることが必要である。

(4) 日課と学校行事の検討

- ① 路線バスとスクールバスの運行時間は、児童生徒数の減少を加味しながら安全な登下校と柔軟な学校行事ができるために検討が必要である。
- ② 学校行事は、目指すべき子ども像を教職員が共有して精選する必要がある。
- ③ 教職員の働き方改革と部活動のあり方検討が必要である。